



硫黄島 戦没者遺骨収集派遣 に参加して 高津励さん

「行きたいと心が動いた。」

六月二十六日～七月十一日まで、厚生労働省社会・援護局によ

り実施されている硫黄島戦没者遺骨収集派遣団として、遺骨収集のボランティアに行つて



きた高津励さん（31歳）にお話を伺いました。高津さんは天王祭では御輿を担ぎ、東日本大震災の時には貯金を崩して米三百キロを南三陸に運んだこともある青年です。

「入間基地より二時間半かけて、

自衛隊のプロペラ機で硫黄島へ」

硫黄島は、東京から南へ約1250km島の周囲は約22km、面積は東京都北区とほぼ同じ約22平方kmです。管轄は東京都小笠原村になります。1968年（昭和43年）に日本に返還されましたが、海上自衛隊、航空自衛隊があり基地関係者以外の民間人の立ち入りは基本的に認められていません。地下壕は全長18kmもあり、壕口も数千箇所あったといわれています。

第二次世界大戦の激戦地であり、厚

生労働省社会・援護局の調査によれば、硫黄島における戦死者の数は、二万二千九十九人です。未だに一万人以上の遺骨が眠っています。

「時間の止まっている場所で、」

硫黄島に到着後、翌日から遺骨収集を開始しました。

あちこちの岩や観音像にも弾丸の痕がありました。錆びた武器、青いガラスの小瓶、医療用に使用されたと思われる茶色の小瓶、空薬莢、ヘルメット、雨カッパ、多くの手榴弾もそのまま置いてありました。米軍の物でしょうか。メイドインUSAと書かれた物もありました。軍隊手帳もありましたが、ビニール製の表紙は残っていても中の紙は粉々の状態でした。

「凄惨な戦争があったことを実感」

10～20cmと土をスコップで掘り起こしてふるいにかけて、骨のかけらが出てきます。収集した骨はその場でいったん白い袋に詰めて行きます。指、下あご、腕だけの遺骨もありました。



小笠原村HPより

爆撃で吹き飛ばされたのでしょうか。頭蓋骨の一部が見つかり、そこからかなり離れた所で他の骨が見つかりました。一柱だけ、亡くなったままの姿で見つ

かった遺骨がありました。手に触れた時にはポロポロに崩れてしまい、言葉にならない衝撃を受けました。どのような気持ちで最期を迎えたのか。ご遺骨を前にしてその方に思いをはせました。

島内のあちこちに碑があります。飲料水は塩辛い井戸水か雨水に頼るしかなかった硫黄島。照り付ける強い日差しの中、碑に水を掛



けながら「どんなにこの水が飲みたかったことだろう。」と思いました。

収容したご遺骨のうち、ご遺族に引き渡すことができないご遺骨は千鳥ヶ淵戦没者墓苑葬式の際に千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納骨されます。

今回の硫黄島戦没者遺骨収集派遣団は、

JYMA 日本青年遺骨収集団、日本遺族会、硫黄島協会などから三十六名が参加致しました。二十代二名、三十代一名で高齢者の方が多く参加されていました。

お話を伺い、七十三年経ても、葬られぬ方々が多くいることを実感しました。

犠牲者の方々の無念さ、戦争の悲惨さを知ることは平和の大切さを感じるようになるのでしょうか。戦争の傷跡がまだ残っていることを忘れてはいけな